



色  
集  
集  
二



中村俊定文庫  
文庫 18  
713  
2

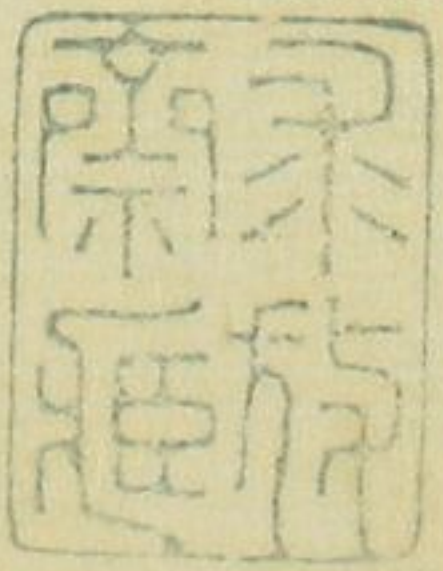




元禄二年己春

らんふやくはらふまゝくろあまふ  
吹あけくろくろくろの音くられ  
及鴨くろく鴨もはハきく  
七魁山を 出くろ 自  
所つくり葉の葉くろ砂くろけ  
鳥くろくくろくろくろくろの血

芭蕉  
嵐雪  
、  
蕉  
、  
雪



坊より老といふは遠きく  
七の解つて神のちうり  
生あよりえはく細り毎となり  
日くれて ぬる松り切りけ  
赤白を塩るを版をつまじきて  
個ふう厚をよこは ちくすり  
舌根と念仏をやくし辰土衣  
小城ハ稀の井にけりり立  
杖をう川庄の石よりなり  
い片りあもんやおとけの月

、 蕉 芭 蕉 芭 蕉 芭 蕉 芭 蕉

ちるこれと垣根をうろ 蕉高  
ひまろよと重よ 萩の下しよ  
力のうまも中子の見張るまは  
いつこのうろ 楠の名をさる  
柴をこのうろと越ハ 破るより  
讀もよんより 噴ハ 馬石  
ゆよりの思ひてませる秋の風  
髪切育の月うむの先く  
長門より海の木の根とひり  
粥小 卵ハ ぼんと喰くそね

、 蕉 芭 蕉 芭 蕉 芭 蕉 芭 蕉

山茶の好ハあ仙梅つとまき  
 雪より鞠おくハッ費ッる  
 やりりまむ大江の春ハ八朝家  
 削り居るハハ 杯籠のつと  
 池隈及もえとくのまぬまのふた  
 祿宣ハ 狭りハ 神も喰つと  
 花とより飽もりのま せりん  
 共といくと 田花路のま

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

松築して梅あつたある白ひは  
 蝶あつとまき 入らちの杉  
 うさわつち 消る雪とやかろらん  
 石のくぼきに 雪をすりけり  
 月移る春の影をわらまき  
 のころハ 猶此帰る芽畑

曾良 塔山 路通 芭蕉 山 良

街のより待無あふふ杖の風  
 あうのうらりん窓のまうけ  
 けらささく為紗さる玉の振  
 ちのものりる晁のよりさよ  
 ふらわきて杖あられぬ大の舞  
 舞りの程致と 町よむらむじ  
 む造りの酒のうきもなほり  
 月もさやとふむ詠るの市  
 物衣さぬこのわに打たれ  
 家とさか鳥を君ハ切はあや

蕙 通 蕙 良 山 通 良 山 通 蕙

苑のうは室のまよりたをせたり  
 古葉の坊のふとりのあき  
 講堂よ借違あふふ去のれ  
 たりれふ 幸れ 惣あのれ  
 形代よ姐若あふふ志あのみら  
 こけし 早のすこき 舞風  
 屋根葺もあふり 冬と不徳の関  
 極おられし 田の中の小田  
 時きやせく 窓あやあつらん  
 家よのさし せむき人

蕙 通 山 良 通 蕙 良 山 良 通

け 意をいそひとすれば 吃ふて  
うされて 寝る 中の 戸の へす  
枕よ 目を ぼく 程の 夕月 ぬ  
つ べと けしき 谷の おくろ  
火を じげ 火の 洞も ぬきり  
必を かなと した のこは 唯 礼  
おろろ 父の 息と 言ふ けり  
折ふ のせと ちの 袖の  
入る ちわたり よしの 花の 実  
何々 何や ちの ちの 意

山 意 山 通 意 良 通 意 良 山

功を ね 糸 肩と ちり 残 衣 小  
あ やり ちの 衣 を けり 意  
松 ち ぬふ と の わ の 池 へ  
ち へ ちり ちり 猿 の 橋 へ  
い ちよ びも ねの ち ぬふ ちり  
ち ちり ちり ちり の 林

意 成 意 山 此 意 意 良

露のつゝ家もぬれても竹のうら  
 木ありとては 竹の松明  
 五月を小袖のさしもぬれあは  
 落る髪を とさううらつ  
 高けれどとて人よりもぬれ  
 細く去つとてあつたのさし  
 雪をうらとて火熾とりま  
 手寄 ぬり日待 つとて  
 梅の香も交へ交をう吹く  
 相のさしとてさうけれ

山 嵐 葉 良 翁 山 良 葉 山 翁

旛車 ぬる赤ハ 月とをれ  
 波のつとてその不こそうと  
 ありて 伊予さうれい、  
 大お進とて わちれい、  
 城水のさつ雪 晴るるのぬれ  
 起て火をさく 障つとて  
 竹のゆり ぬれ子 ぬる月  
 組てこうせハ 麻糸をちり  
 山 月さきひとてぬれ 葉の  
 くら木さしとてぬれ けの小

山 良 山 葉 山 良 葉 山 翁

流るるりと身を帯ひむ物さし  
あゝのゝ百人をささぐりけり  
狼の妻して鳴る 友の月  
あゝの光を燈よ 仏さあそして  
妻をまは流訪の温泉のあゝり  
流るるるるる 冥のささぐりの  
何れよ人の従者と身をちけく  
強よ居れハ 綱のささぐり  
一門乃不えの流のささぐり  
友をつらつら 栲波の 翁

竹 錕 山 菜 良 意 山 嵐 竹 菜 意

那須余遊櫻桃を

たつた

株有る人なきとりれ友等これ  
ささぐりしことこけり栲波の葉  
むらぬよ市の飯屋を鳴るる  
所の中なり 川打との月  
響の音をよと居るるささぐり  
翁乃すも忽れらりあんの流

と 意 櫻 桃 良 桃 意 良



おいと小笠よ息を折入る  
 ともれとつゝさのり合  
 多々に火を焚ゆるおも形  
 笠人こゝろ二十六のちと  
 松のひふ笈をちておらん  
 音うささげて連歌うもむ  
 藤おまおうと小笠く炭俵  
 さわさうさる尾連の居  
 あの月も忘れよと燃れ  
 高とつぼむ物のいささし

蕉 枕 良 瑞 枕 蕉 枕 良 翅 瑞 蕉

綿繡よ時めくふのおくり  
 已りおのゝろの小车  
 日傘はれまもすうてまの庭  
 衣を 袴てうさよの舟  
 酒のめら谷の朽木も仏なり  
 物人うら 此の相明  
 高武者の豊のちや茶枕  
 水とくくとくりの音  
 日中の寝つゝはよぬたり  
 一合りすゝ 夏流の夢と也

良 里 瑞 枕 良 蕉 瑞 枕 良

乞食とはして浮世の物流り  
 洞の地蔵よこり。有明  
 考の系ハ猿のさへも平海つらん  
 舟をささぐり〜 倭人 采州  
 々々も又船自をおびるの上  
 米とさくら〜 以 勝の〜 さら  
 籠のまじ〜 とうとこえてむ〜 たり  
 粟の風雅をりのに虫つ〜  
 ち〜 さいし 糸をさ〜 毎毫て  
 涙をさ〜 たり〜 の 味。

癖 枕 惹 里 惹 二寸 良 癖 良 林 鳴 星

風流れ〜 ちや 粟の田植〜  
 いちこをさ〜 たり〜 糸ま〜 けり 年  
 水世きて 平ねのちや 巻〜 せん  
 鈴〜 練の奏〜 いく び〜 たり  
 一〜 たり〜 月よ 益さ〜 川 柳  
 腐〜 たり〜 や〜 たり〜 村う 杖〜

芭 惹 篤 窮 良 惹 窮 良

街の女々上院を伝ふ葉をきいて  
 昔をたのしむと浮心しとこのの  
 わる時月様もゆかぬ入ねん  
 樟の小枝よ 葉をきいて  
 しんては嫁の富の名もみく  
 表しよと心やしんてふもけ  
 酒りの軍をきいて 園よみく  
 杖をきいてゆかぬのよしんて 僧  
 文らねの壁つと破る麻の角  
 鳴の 口 例をほききと月

恙 良 窮 恙 良 窮 恙 良 窮 恙

いらしれ行をきよこのりわて  
 彩ふふりひとつなきしとひよ  
 山々の尾よそと葉をきいて  
 芽あつとち借おつあつとさ  
 薪むくき十葉の流りし  
 おのし武士のきこり。高  
 葉とぬいのね葉のきく河を  
 葉よめきけしと名取し  
 名まらしとふと葉とけし入て  
 何やしとこのたしぬ七夕

窮 恙 良 窮 恙 良 窮 恙 良 窮

位なるやの極の月をく  
すふあゝむと糸の髪  
切櫓 枝るはりにえり  
石山 つゝこの舞う  
佛しや湯もさくさき  
教生るの下を  
糸をさるに掛りさるひぶて  
酒のまよひの出しる  
六十のなう人の中月を  
整ぬすゝ象子小神うたわ

良 翁 意 良 翁 意 良 翁 意 良

隠れ象や目たれ花を刺れ糸  
すれやほつゝのときゝ象と水  
切櫓も山の井れ糸六骨うた  
畔つゝさひすれ 石れ極 櫓  
たを結つゝ。美葉う月の言う  
秋しゝうほの 繕をうたわ

七色  
雲  
管絃  
口良  
管絃  
次等

梓弓矢のねれ露ををるせと  
新ををるめるあつきの花  
松齒牙に吹よるるもよの書  
酒のそ浪をりよるるれ  
香入る新にまてし新  
出れてあられる竹城のそ  
多入るを神よるるれ  
月のむつををるるるる  
独して少魚釣るるる  
笠の塔をする草のるる

葉 良 雲 竹 弓 矢 葉 良 雲 竹 弓 矢 葉

柳の出る初陽をよりの花の時  
うらめる若ふ 証鼓 打く  
あつはるるををるるるる  
あゆむ出れば馬鞍うるる  
よるる證をいりるるる  
かつてし雲の縁やきるる  
新舞の髪はく古ふ御はのそ  
扑をりる。 市の酒酸  
新舞に三社の酒をいりる  
乃るる人云然と 明ふるる

葉 良 雲 竹 弓 矢 葉 良 雲 竹 弓 矢 葉

口をのゝる野の暮にまはる  
此とて月をくぐる雲の如  
色をてのひふよ星れしとつる  
麻の多たえとくをせぬ 雲  
冠をもたふくうに法一(厚重)  
文、張りたうくおのひをわし  
遊(人)はくまうくもていんふた  
きもせしせり一思ふたのち  
入(山)は門亦法(の)る(の)山  
はくまを(と)う(と)く(ま)の(と)く

形 言 雲 良 甚 朽 葉 音 良 意

此もれをあらとてみ 乳上川  
常をつめくき一の船机  
凡そつけいたよふやに影待く  
里をむしりき 素れ細る  
牛の子ふんふたむくまうれ  
而るを一とらるの吟

とせ成 一葉 川水 葉 意

侘を枕とまゝの山おろし  
松むすびおろすまのさうし目  
永承の古より寺跡といひて  
爰て合する大徳の残  
薫の名をわらふまゝとまゝ  
凡そたゞの山と砂土の名  
寺の物と麓より見の送入  
松ふ人よ告る 松風  
あつた井水の月と影を  
碇うてとくくえりひ出さる

水 松 蕉 水 松 蕉 水 松 蕉

花のほをれをわらふまゝ  
糸と心とまじり山と竹の塔  
榎と村の浮きと舟のまゝと  
刀うりする 甲斐の一乳  
海垣人もとほりぬ 冥にたり  
りのまゝとひよ刺る 松の本  
望みうとこはしとくれと  
葉と松女の名ととむす日  
麻笛と葉とをわらふまゝと  
葉うりた出くぬ海とと

水 松 蕉 水 松 蕉 水 松 蕉

新うら暖木片と草のけらひよ  
 きくくあさす 子日の証  
 古里の友と秋さうりうり  
 とくし 滞するふれのり合  
 雪こそれ師老の市のさうり  
 すくさみの目とま 席のあ  
 七人を古と懐残よりくられ  
 やりうりうりのまよ 入ね  
 年つくと雪も残へさふの岑  
 山田の情をいさむらぬ

良 兼 水 兼 良 兼 水 良 兼

宵寝や雪をのそくは 風の色  
 伯原と 人の路よ 友学  
 川舟の路よ 雪と 引とて  
 物の形 流よ 今あるまよ  
 空あにてもさうら 娘の音  
 小も弟も せあさ 打ちり

雪成 露丸 雪良 初雪 殊妙 梨水



眠てハ 屋れ流りた 笠ぬきて  
 百子の 籠と 木曾の 牛追  
 山を 伝へる ちの 地を 志す  
 芥子 持す ちの 井 木の 杉  
 翁よ せれ 汝を 引り 歌を して  
 夏く せぬ ねハ 何と せく 鬼  
 古御 には せと せく せく 拾は 善  
 系に ち枝よ ちんく くの 籠  
 月と せと 引 起さ けく 船 ぎ  
 髪 あつ ちの 籠 の 象

籠 良 水 籠 丸 雷 良 丸 籠 雷

ちの ちの 犬の 片 一よ ちて  
 め 場の 末に ちん ちの 籠  
 ちを 籠 七ツの ち ちら ちえ  
 汲て せく せく 罾 井の ぬ  
 ち引の ち ちの ちも 拾り ちの  
 ちの 門 ちの ち 籠 ちの ちり  
 ちの ちの ちハ ちの ちの ちの ち  
 ちの ちの ちの ちの ちの ちの  
 ちの ちの ちの ちの ちの ちの  
 ちの ちの ちの ちの ちの ちの

丸 水 籠 丸 良 因 丸 籠 雷 丸

籠の鳥を猶教ふ夫とてよて  
 篠りけし居るおほくはは  
 丹山のわくの風う骨うむ  
 孤松のや孤松 電のしけ  
 ちるひの持よん身し心古  
 鳴子 鷲くく くの藪のま  
 笠人よつれなみ妹、身を造て  
 新もそなぬ 風くくの糸  
 空のさくれけい海すふの辰  
 まくおけぬる 燕の舞  
 鳥 入 良 水 丸 宮 翁 衣 今 水

出たつ移るお言せよし破れうわ  
 くしめてうきる 風のたよゆ  
 葉作り淋よ芒をとりうくく  
 身立うくくは 虹のりとすん  
 ともろろ月よ二ふりほらなり  
 る市とられて弱歩しきむ  
 風 涼 松 成 良 水 柳 風 草

標々了の父の弓矢とてり侍人  
平拭とて 東と出るとも  
梅のよはとすもやありふる瓶を  
すれをわけてとありつとて  
之をささるる夏と古のさりけ  
浪の音す——万れとて原  
鳥のぬるつはとてり  
籠のつらるる 猪のつら  
しそ——月を焚のふ社とて  
底わつらんと 東と出るとも

標 松 鹿 柳 風 木端 如柳 良 漆 意

らるるのふは衣を 東と出るとも  
うけらるる 東と出るとも  
たのふと茶をむとてり  
果なきとてり 東と出るとも  
袖香煙とてり 東と出るとも  
やてむの草凡ほのつらり  
老僧のいて小堂とてり  
武士とてり 東と出るとも  
自うと麻も鳴る 東と出るとも  
ねおりの包む草とてり 東と出るとも

漆 松 良 意 柳 風 端 漆 良 意

秋夕のてけをたにむむ 菱のうた  
うさむすまをさるゝこのゝ岩くま  
乘るる舟をのり夕まられ  
水城の猿よ午ゆゝくま火  
きる供沛のあられも殊くして  
よこれてさむく祿臣のし強  
ほりくし石のうらみの露れり  
ししあふふもぬのつれく  
咲くさふをたよ袖しふて  
雪うさしりこてままふ高

良 皓 柳 風 流 意 皓 風 意 柳

袖之浦江上晚望

あつこやうけけく夕 涼  
海和る磯よまむ 帆延  
月とて関屋をくむ 酒持て  
七の毫乃々々 輝風  
中しけほりまきま 冬栢  
菱のたをさるゝ 菱の毛

良 玉 意 良 不 玉 意 良

有屋郷。精洞の市上その  
 火とたゞ後々〜たまたま  
 海をハ〜らもささ〜切せら  
 松の成さる。武深の七彦  
 子ま〜ら〜き慈も志智ひ〜  
 波の糸小ト〜こと  
 出供〜わ〜あ〜あ〜ん  
 こ乃世れ末も〜の〜入  
 船つ〜あ〜常〜の〜の〜  
 々〜い〜の〜ら〜と〜持〜の〜乞〜食

慈 良 玉 慈 良 玉 慈 良 玉 慈

かしき〜る〜記〜交〜と〜兼〜更〜打〜で  
 杉原らの心れ 麻にの月  
 物と〜と〜研〜大〜利〜〜〜の〜風  
 す〜〜ハ〜游〜ま〜き〜由〜山〜ひ〜め  
 別力の遊つ〜つ〜〜〜世傳ひ  
 枝と〜を〜さ〜し〜〜塚のわ〜〜ま  
 幼童ハよ〜〜あ〜さ〜岩と膝のひ  
 えひまのきぬを踏〜〜〜位  
 聖〜〜〜し〜厚と懐〜〜〜〜筆で  
 月片〜〜〜〜 活中の市

慈 玉 良 慈 玉 良 慈 玉 良 慈

御薬を其着の打くは返り入  
 小神と申すことさる戒の所  
 取の厚の母と仰るもゆりて  
 多きはあはれね ぬかればとも  
 なまの京持傳へる 古今集  
 ぶく 舞を切 坊の海蔵  
 しくはすれ業を立しむぬつは  
 警たひくことさる 第一自ら  
 録本を作りて古き熱をむ  
 しくさる 危とこのむ言違

良 煎 玉 良 煎 玉 良 煎 玉 良

めつ ー や山と出ぬのさつなは  
 せしと車のおとうさる 井戸  
 踏くこのれいさうへ 扱と打て  
 宜 添すれ 末乃三りり  
 糸の厚よりりのさるなりとの  
 銘小 坊 標と付ー

七せ以 重行 ソ良 呂丸 行 煎

山のくまきくきりけつけり  
 蘇るふりつとハんとまきく  
 粟科と日との母よひ胞く  
 弓のらりくと新くするの戸  
 赤櫻を母のくまに柱おれ  
 花よ 妙す 小田のりま  
 け杖も門乃板橋くつれり  
 救免ふりれくむれり  
 きねくハむるも何くさの鐘  
 宿の女乃姑さりのしけ

丸 行 良 行 良 行 良 行 丸

婿入の花さるるに打ち立て  
 りとの廊ハ 細く焼く  
 重銀のまも一ふよ 改り  
 赤良の部よ 夏鷹けり  
 け鳥ふえわしれとや谷わけて  
 祐まきさるるにがまひ  
 くるけさハ目を泣くくすく  
 はくくよ 友を うさせて  
 子日の移を 結く小杉原  
 塔半のくくを誇つてす

丸 行 良 行 良 行 良 行 丸

カハ埃の穴と差や差つらん  
 こけてあたまごとくまへ下りも  
 雨とつる月をり跡のそよとて  
 温あうつる 倍爽の杖凡  
 ちつ厚の比よりさよ氷のたけり  
 山そと作る 美のさきく  
 尾くちも男よまたるらんよそ  
 けりよよへさうこのつよ捨  
 谷の所 ぼとやういふはるる  
 整よきき—— 美のひえ

良 真 九 行 良 九 真 良 行 真

跡の若き自よに料進成をすん  
 経のさまゝして杖の日の影  
 月よりもしりおの末にる次て  
 すきるるまひよ村の生垣  
 秋銀浪の門をさうて柵の香  
 小挿の——さう 美のひえ  
 七よりやき——もおんの香  
 名をと 放せる 美の葉原

七色紙  
 一象  
 左化  
 ノ松  
 休急  
 滝子  
 雲口  
 乙女



よしおのふらふらわのつ地しと  
 とりしつれはまらた出る月  
 帆定と嘆井しるたしる  
 已り立本より子孫の指  
 ありあはまり孔ふ中と縁起て  
 所いめしこゆふめさる目  
 系うて麻布に糸あふ意衣  
 わしこむいふまきふのふ  
 学の戸のふふらうすきあそ  
 るしおしるもししてまき

女柳  
 水枝  
 昔良  
 流志  
 泉  
 意  
 枝  
 口  
 浪生  
 良

馬つらて燕追ひけりこりれれ  
 とれ望れく山のまつり先  
 月よりと角カに袴端ぬさて  
 鞘をしとやつてとあたり  
 古測ふ物の究込ふの意  
 紫りりこりて火介のしるる

水枝  
 昔良  
 意  
 枝  
 良  
 意

わ〜れ珠匠の山ハ 黄のち  
 拾女にふ人田舎〜〜〜  
 落とふ熱〜ふ君の名も〜  
 髪ハ〜終と 急〜な〜なり  
 蓮の糸〜も中〜飛海〜  
 先組の糸と竹〜〜門  
 鳥の糸の糸の〜〜〜  
 霧 走〜〜 楓のち外  
 秋風ハ〜のい〜ぬ子も〜  
 一〜さ〜波乃 續〜 葬礼

枝 蕙 良 枝 蕙 良 枝 蕙 良 枝

七羽の鳥々 古よ 却の所ノ遊り  
 去をのこせ終 在仍の箱  
 古系片や〜〜〜 難波の貝片〜  
 銀の小端と 如月 芥〜焼  
 又〜〜に〜とぬの埃〜  
 ち〜〜〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 陸小神 打ち〜の黄の古風〜  
 北苑人 ち〜人 の〜〜  
 鴨〜〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 おり〜と〜と〜と〜と〜と〜と

、 枝 、 蕙 枝 蕙 良 枝 蕙 良 枝

幽卷二

二十四

鈔竊心子の杖と修りしと  
 小俣もらりし伊勢の神風  
 鹿瘡ハ素直目承もくやりて  
 るくれとまじり 枇杷つとまじり  
 細さうさ 仙女の姿たもやうに  
 わらわきしほるあれし浪  
 仲路の今浪の細代と打るる  
 ちし 丈を たけの 口上  
 境持く 拵心苑もらりしを  
 碎 犯 人 と 活 け くれし

蕙、枝、蕙、枝、蕙  
 草

二とまじり介らるる藤あふくく  
 歩のよひききと 蔭路の下  
 残衣もむく夕るく月すそを  
 あくまたむ 所のこまうさ  
 極木やいふ木より 新と返らん  
 食のすまぬことハ おぢしん

路通  
 葉夕  
 白之  
 蔭夜  
 夕夜  
 川良

肌をさして人よをさして夕まくられ  
呪うくのさす 時のとくしー所  
鏡よのくさした値し破れ之を  
細く 弄りしてぬきかよひ入  
弄り花のをく 唱ふりり  
月尺ありきし 鏡の影を  
あふくの貝殻さる布袋  
地獄路をくくさるの影れは  
衣くのを自よ鏡を恨ん  
街、垣根よをやじ打もけ

夕通夜本因  
夜因通慈之夜

是處ひくきさくすぬ里のをれ  
衣の葉ちと後 わくは 唐  
七月や着の甲と おひて  
わくくくひく 音の 明星  
管よりり弄り弄つてし  
以の 家よがとくしれ  
あさくくたのび使のくしと  
旋く ねいへんまや  
ささハ 慈の弄りの性  
業をくく 人よはと ころ

之慈夕良夜通夜之  
夜因通慈之夜

田をうき傳ふるまはし 東門 慈  
 犬 月見くくる 森の 入くら 夕  
 夕月 萩をほふつさりりて 良  
 うらうら 金さ 杖の 炭やま 和  
 空くは 彩海をのちとほるや 夕  
 とや 過ぎきのうらうと 株わけ 通  
 おもしろてえやとささる 朝露 之  
 麦もくくく 一りのまきく 慈  
 倉を 居くくまきく ちさく 夕  
 小くくく ちさく 雲のうけ 早

いし子も 走りあつむむわれ 七  
 おちまよきしま つかささる 良  
 お帯の 凡やびは 神来て 樽  
 居 角からくむ月のまじり 之  
 若の 息この 後よの おりれや 七  
 ちくく 居る 岸の 園 豊

鶉双のむらさき定よ打ねて  
 りのうらふらも縄の苦しよ  
 者あふのし子健も清士のる  
 けられたすけくるれまう  
 冬残しのひくよとれうく  
 袴もとてそやまれたり  
 るの音 侍輩達のとりくは  
 月入るるふのうらふ  
 杖凡のすれあふはむ出で  
 簫よ 去りたり萬の心在

品 燕 凡 燕 芳 紗 凡 燕 燕 品

るしとれは幸小停るふの居  
 ねかり 抄しるその糸ま  
 湫まゝ耕るをしらるる  
 その元しる 粒粒の住  
 るら音よと下の白と出たり  
 云しり 打ねるあかのあ  
 若しし君の幸部塔に泣きれ  
 母とつれよ 終よ くらこの戸  
 孫もよも 訓れはあさ 流の音  
 凡雅仕あまし 酒のこのすま

燕 芳 凡 燕 品 燕 紗 凡 燕 芳

世の中ハききん界なる孩も  
 能るもこれハ仏きりたよ  
 五福神ハ月をくま〜ぬ  
 傍の舞も〜 乙の夕ぐれ  
 女所むるま〜つらと〜ま〜  
 うささ 子れと時〜わ〜  
 せれましたと音ぬ〜音の糸。  
 白髪〜 神子〜  
 た義歩の 噂〜より せれを  
 流〜 鳥〜 する〜

品 風 蕙 蕙 凡 品 芳 跡 蕙

ふ〜 や〜さ〜所〜  
 ら〜 跡〜く〜音の〜  
 野の〜 此〜  
 系乃〜  
 宵明の〜  
 くれ〜  
 位居〜  
 芥子〜  
 被衣〜

蕙 格 水 泉 笠 人 荷 成 格

あは發さるゝに生るゝはたぐゝ  
精出ゝく重子おんくらゝゝ  
あまふそのゝさ新ノ伐やる  
雨あつた烟あつたのあをれ也  
祝しきゝて長々 秋死也  
系とつれ登るきは月の下  
まゝの目のまゝめ 眉のつゝ  
思ひゝゝ後つゝおれはら  
思ひり 壺のたゝくあたり  
まゝくと 節あたるののゝま

人 象 水 梧 人 象 盆

あは發さるゝに生るゝはたぐゝ  
精出ゝく重子おんくらゝゝ  
あまふそのゝさ新ノ伐やる  
雨あつた烟あつたのあをれ也  
祝しきゝて長々 秋死也  
系とつれ登るきは月の下  
まゝの目のまゝめ 眉のつゝ  
思ひゝゝ後つゝおれはら  
思ひり 壺のたゝくあたり  
まゝくと 節あたるののゝま

盆 象 水 梧 人 象 盆



終一牛一をハ於モ釣リ

水

そとてふく終

わかれとよのけと曉一笠倉

如行

舟の文 釣る竹一舟中 暮

夕道

舟あて 擲りささる 磯海小

荷号

汐のそよをささる 由る 洲老魚

望水

海よりして 心ささる 暮の目

夕成

待つ 秋の 階を ぼく

月

原より 一うに 夕の けしき

越人

源 志い きふ この けり 力

芭蕉

暮 える 経 病 屋 小 夕 夕 人

人

理 を けり けり 梅 の ゆき

人

瓢 箪 乃 大 き さ 五 五 ころ や

人

風 上 ち かり 帰 くる 市 人

蕉

るに事一も世あるき名刺の地  
醫者の多き地目も厚く  
いとういと仰せられしに立出さず  
いづれをき法やかく寺に送ら  
けりしに古きと書の名をたて  
き法とせぬ雨にあけ原の  
きぬくやあさうはうくあてや  
風もよたさうと名のうら  
まもつと書れは独もす  
物磁とあり舟送るもなり

蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉

月とこれ比良のき根をおろ  
き在 嘯れし乃 肌ぬき  
破れ戸の釘うちつぐそのま  
みせさるゆきまのむきわ  
泉きくつ根糸を包む十寸透  
ものねりひわも神子れ物い  
人去ていよと書中の白ひた  
と川 瀬よこも 堂れ片隅  
ほくよは嵐のあくく丸中ふ  
垣 櫓 乃 ありきまのいほり

蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉

わちふくまけり妹。ゆふさ。免  
 阿のまゝハた。なまゝ。包むる  
 月乃られあつて消水に  
 おねこしをく鞠よの孫あり  
 娘の田をうら勢ね事れも引く  
 市い〜る〜又字同〜母  
 いり〜と毛もあ〜れ母系を  
 能きすれるれ癒て〜ひさき  
 それの比流成らまら〜し  
 田あ〜まら〜つて解さ〜ら  
 人 人 人 人 人 人 人 人

たえにんて音見よる。残衣分  
 凍片居るさ〜 捨られぬ花  
 松風。移し。日向のすれと  
 鶴 白鳥の 切つて折り〜ら  
 水あ〜すねゆひあ〜の秋の音  
 露よ 山の陰〜月の一もら  
 人 人 人 人 人 人 人 人

まわくもをけりしを春にけり  
眉はうしろも知らうけ女  
ふもあはいつともうけおれ  
けし飯のぬのはあつて  
あつてあつて布を辛くあつて  
涙うらやまよハきえし  
門はのりほく人ハなうり  
爰小雨ももれぬ  
よき程におなうけのまわ  
おぬるなると猿つり月

越人 舟承 眉 相 碧 水 兮 意 雪 人

うらとけは小町のまわ  
あつてしつとぬら  
尾寺のま雨續く  
ゆべなるれハあつて  
ゆらけのあつとあつて  
布杭二本あつて  
隙くけし妹をわつて  
食養すしを代へ  
旅立のころはあつて  
りし製判し鴨川のぬ

象 相 碧 雪 人 兮 意 水

蝶のまにに昔の衣も身より  
ほろもいづれが影くさくさく  
月一のよ火智を消てまると入  
りのまゝく君をおとひ秋風  
け橋を好きて帰る方の中  
山草やいへくまの初る 弱  
まてうらめて戸投はく心くらたう  
いづついふふもさういふも  
蕨のれ中いも様やま

相 人 片 意 象 雪 桐 水 草

たつたや備も  
も向の別いとう  
と名と改

初秋の海も田やうきうりれ  
まひさされ 口とひれり月  
そ果庭 芳月のうきく葉を破て  
やせさる 藪の糸 まさううたを  
輪のうきうきとくれ う妙ふ  
まきううのけくぬるうや

えせ 年辰 急足 如風 安室 自安

白雨の雲つ〜切るの跡  
 田つ〜ふむけ〜雪の跡をのみ  
 此乳うひ〜日う〜物や〜ち〜む  
 中〜み 跡され まの園〜  
 路並弾〜く〜音ハ泣て〜  
 鈴蓋乃き〜く〜知れ〜  
 新〜き〜丸の鬼の〜け〜  
 絶縁 院〜〜 入相の懐  
 歩 漱川む〜〜 角力〜  
 樽切〜〜 月と砂 たり  
 宣 風 辰 宣 露 笑 風 足 風

都の音響に〜き〜き〜き〜  
 あ〜り〜き〜 寺の〜  
 漱川の橋〜〜は〜  
 白鷺〜〜 岸〜〜市  
 芝〜〜此朝露〜〜 布〜  
 夕〜一七日 戸姥 じ〜  
 け〜〜。百歳の〜〜と〜  
 書〜〜きん 人ハ〜の〜  
 湯わ〜れ 肌〜〜 伽藍と焼〜  
 む〜〜知〜〜 乃 井 垣  
 歩 足 宣 露 足 笑 足 宣 牛歩 足



本れ多うらる 後のすたも并を月  
 行してららあゝ——よれ喰を  
 造らるゝ故の鳴きさうよ福しんれを  
 系ううらうら書 言を并らうら  
 あつげをさるる 髪に 次うら  
 死く するも形さしたうらうら也  
 不露もあうられを家おの月  
 簾をさうらうらおわうらうら  
 大うらうらうらうらうらうらうら  
 一うらうらうらうらうら 雲うらうら

氣 彈 人 并 弓 虹 及 彈 人 并 弓 虹 及 彈 人 并 弓 虹 及 彈

雨乞よすうらうらうらうらうら  
 舟——ゆいさうらうら 朝のまも  
 旧和あうらうらうらあひのさうら  
 本る 本——うらうら子も平うら  
 いらうらうらうら部つすうらうら 舞うら  
 切花うらうらうらうらうらうら  
 市うらうらうらうらうらうらうら  
 人 一代の意を うらうら 秋  
 於——世うらうらまの恨も川うら  
 まうらうらうらうらと教も洗うら

公 虹 弓 及 彈 人 并 弓 虹 及 彈 人 并 弓 虹 及 彈

幽卷二

三



懐ふ娘さ〜持く〜さ〜とこれ  
 下戸をふくめぬ雪れおの亭  
 子候の梅をふまふた〜と  
 嫁せぬし〜めれ眉〜とわ  
 思ひねふす〜き〜ぬ〜の君  
 滑きやし〜る〜山〜の火  
 明や〜お〜と〜後さ〜  
 何を〜り〜郭〜や〜  
 荒〜。祝の苦〜りの〜さ〜ぬ  
 ず〜れ〜と〜は〜ま〜れ〜夕〜暮〜

及 兮 海 及 人 兮 海 丘

様麻〜高〜所〜此夕月夜  
 庭〜せ〜く〜は〜る〜う〜は 雪  
 と〜や〜さ〜危〜を〜あ〜る〜茶〜焼〜て  
 残〜漣〜を〜く〜 卯〜章〜有〜言  
 碧〜持〜の〜莖〜の〜く〜を〜流〜る〜川  
 隣〜子〜あ〜れ〜ん〜ま〜ゆ〜 燈 火

七世 一井 彌人 昌碧 荷兮 燈火

起もせしやうしる白ひぼろりよ  
 午しりりり驚れ汗ぬるし居る  
 麻布を嫌ひ家内も大織意く  
 菌とららこえんはわらこせりき  
 ゆらられ先よまこゆる雷の勢  
 るもあやうぬ山陰の霧  
 巾をくたうん矢を袖か射身を世  
 飛あつたけけとありんる月  
 本〜にららてふ乃らららる  
 らららにけけけくやハる也

東臈 蕉 吟 吟 吟 吟 吟 吟 吟 吟  
 人 蕉 臈 吟 吟 吟 吟 吟

餞別會

穢人と家名よれんるりりれ  
 赤あしむ羽を高くあ〜く  
 鶴鶴の心厚と世のたの〜たお  
 頼をこ〜け〜る山陰の鶴  
 うけあわ〜く芝生れ鳥の沙路  
 新〜舞〜巻月々 暮〜也  
 中の叙 雨ユ一連れ帰る也  
 鶴調〜〜〜 漢舟

芭蕉 由之 其角 枳風 文鏡 仙化 魚見 觀水

神垣や次舟の御き波のひる  
 嶺ときをくま さまゝ若き  
 酒のこふささるる遠のさひわく  
 卯月れ雪を揚るはくま  
 鰯は神つゝくまりあぬ川  
 麓 一面うあゝるさく 祝  
 ちりしは里おあゝるを傍の  
 月ふやほん 泊ぬの 薺人  
 着るさくく白ひも都なつゝ  
 ちりしは事くを洞の 俵 俣

全峰 嵐雪 枕草 薺 之 角 風 縞 化 翠

途中にたてて車れ麓さく  
 仲こく舟ふさくくさく  
 花れり名れはくはそあし  
 河くく原をえは 此の自  
 水の岸さくくくませれ外より  
 薺れめけめの 雪をと焼 友  
 老の身乃 洞さくく福さくく  
 君流るくくはれ 岡 古  
 唯さるはくく河の杉をさくく  
 舟を行く 舟く 遠く 蟹

薺 之 水 化 之 薺 白 雪 之 水 白 薺 白 南

起ちくもあつそん 海花子  
 一々の沖寺を 粧ひ有明  
 舞やろふ心 坂乃里志原花  
 小細あひさし 夢山子作らん  
 弟れ戸乃るを 酒債ふたさる  
 つひなる早と 妹よりあなへ  
 羞乃るり 毎白きゆし  
 懐り片く 氏乃天王  
 池牧野く 笛吹男よき  
 僧とるく 橋よきん杖

雪 水 峯 凡 蒸 白 化 角 奉 風

今くくと文字れ子昂を 嘯く  
 埽の錦 蜀を あく  
 遠家や ぶお虫の友く 文りおむ  
 花くくく 海若すくく  
 岩深ふ 日く 花の木月の  
 春くく 春 春乃く

角 雪 水 蒸 白 之

幽  
卷  
二

四  
十  
八

